
隣のあなた 隣のわたし

じゅう・かわせみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

隣のあなた 隣のわたし

【Nコード】

N4534E

【作者名】

じゅう・かわせみ

【あらすじ】

医療用ソフトウェアの開発に携わる私。仕事はハードだけど、家に帰れば彼がいるから頑張れる。

1. 夜中に目が覚めた時、傍に大切な人がいてくれると安心できる

暗い天井が見える。怖い夢を見ていた。目が覚めた途端に怖かったという印象以外は忘却してしまっただが、それはいつものことだ。顔を横に向けると隣の布団で彼が眠っていた。独りではないのだという証を得て、わたしは息を吐く。同時に目に入った置時計の夜光の針は、わたしが就寝してからまだ僅かの時間しか経っていないことを示していた。長い夢だったような気がしたのだが、錯覚なのだろう。

「ん……？ どうした、天音？」と、彼の声。

わたしは声を出した訳でも、彼に触れた訳でもないのに、彼は目を覚ました。灯りの消された、僅かにカーテンから漏れ入る光のみの部屋の中で、彼がこちらを向いていることが辛うじて判る。わたしの視線を感じたのだろうか。こんな暗い空間で視線が届くなどということがあるのだろうか。それとも、これが愛の力というものなのか。

「起こしちゃった？ ごめんね、倫君」

でもわたしは、そのついでにとばかりに布団から手を出し、ねえ、と彼の布団を指差す。彼は、来い、と頷き布団を捲ってわたしを招き入れた。そこに潜り込んだわたしは早々に彼に抱きついてベエゼを求める。

「また怖い夢を見たのか」

彼の口の中の苦味を覚えたころ舌が離れ、彼の手がわたしの髪を弄った。

「うん、まだ心臓がドキドキ言っている」

彼のもう一方の手をわたしの乳房の間に引き寄せる。彼はわたしの胸骨と乳房を弄びながら人間が夢を見るメカニズムを語った。人間は起きている間、作為無作為に拗らず吸収した事象の記憶を、その後の自分の活動に活かすことが出来るように睡眠中に脳内領域で

整頓するという。わたしも、夜遅くまで難しい問題を考えて、いいアイデアが浮かばず悩んだときに、一晚寝て目が覚めたときには思いついていた、という事が間々ある。

「天音の仕事は特に頭と目を使うからな。夢で頭の中を整頓するとき、よりカオティックな映像を見せ付けられるんだろう」

わたしの仕事というのは、コンピュータのソフトウェアの開発である。わたしは最近免許を取ったばかりの医師で、一般のプログラマーとしてそのプロジェクトに参加したわけではないのだが、この仕事の話が医大に来たときは既にプログラミング技術がそれなりのレベルであると認められて推薦されたのだ。

そのプロジェクトは、汎用京速計算機を用いて人体のシミュレーションソフトを作ろうという壮大なものである。テーラーメイド治療といつて、同じ病気であっても患者の体質によって、異なった、それぞれ最も相応しい治療方法を選択し適用するのが目的だそうだ。医療ソフトのプログラムに於いては、やはり専門用語を元から知っていた者のほうが、開発効率が良いと判断されたようである。この開発によって医療に劇的な進展が望めるだろうと、わたしを推薦した先生は語っていた。

患者の診断結果のデータをプログラムにインプットして、症状と体質を特定し、デジタルデータに変換する。そこから仮想空間内の時間を進め、同様にデジタルデータ化された治療を施してその効果を測定する。このシミュレータのメリットは、人体ではリスクがともなう実験を大量に行うことができ、かつ比較的短時間で結果が判ることだ。それゆえに、このソフトは、臨床例が少なく未知の領域の多い病気の治療の研究にも用いることができる。コンピュータ技術の進歩により、実用的な速度で複雑な人体をシミュレートすることも可能になった。だが、複雑さそのものが変わった訳ではない。シミュレータを形作るプログラムのコーディング作業の非常なる険しさを、わたしは今、身をもって感じている。開発と検証の双方をこなさなくてはいけないので、わたしの疲労も単純計算でその2倍

だ。

「倫君」

言つて、きゅっ、と彼に触れる。

わたしは一般的な女性と比較すると性欲が強い方なのかもしれない。性交を求めるのは大抵わたしの方からだ。彼はそんなわたしを嫌な顔一つせず受け入れてくれる。でも彼の愛を確かめたいわたしは、彼から求めてきてくれないのを不満に感じることもある。そんなわたし自身が少し嫌いで、でも、彼の側にいる事が、その嫌悪感を忘れさせてくれるので畢竟わたしは彼から離れられないのだつた。彼の優しい手が、わたしの心を癒してくれる。彼との性交で心地よく疲れたわたしは、疲労を癒すための睡眠を取る事ができる。彼がいるから頑張れる。わたしのために、いとこととしての彼から恋人そして夫としての彼に転じてくれた倫に、永久とわの感謝をしたい。

いとこと同士で恋愛関係になつたことに、倫の両親である叔父夫婦はあまりよい顔をしてくれなかつたが、倫が一生懸命その想いを伝え、最後には認めさせてくれた。それがわたしには嬉しくて、そして申し訳なかつた。倫は優しい人だから。

人見知りの激しいわたしは、小さい頃から友達も少なくその付き合いも浅かつた。そんなわたしに、飽くことなく声を掛けてきてくれたのが倫だつた。口下手なわたしのこころの内を、彼は無意識のうちにも上手く引きずり出していた。そんな彼を疎ましく思ううち、いつしかそれを待ち望むようになっていた。わたし達は生まれたときから互いの家の行き来をして、気のおけない関係になつていて、家族ほど近すぎない微妙な距離にいた。わたしが彼に惹かれるようになったのは当然かも知れない。逆に言えば、彼がいなければ、わたしは誰とも恋愛関係を結ぶことなく一生を終えていただろう。

「やらしい女でごめんね」

彼の肌のぬくもりを自分の肌で感じながら言つ。

「俺の前ではやらしい女でいい」

倫はわたしの耳元で囁き、続けてその耳を甘噛みした。

彼の心も身体も全部欲しくなつて。わたしは強欲に彼の愛情を貪
った。

2・疲れて帰宅したわたしを癒してくれるものは、暖かな家の光

その日の仕事を終え、クタクタになって終電で帰宅してきたわたしは、玄関のドアの鍵穴を回した。真つ暗な室内に、溜息をつく。実家を離れて暫く経ち、一人暮らしにも慣れてきたが、暗闇に出迎えられて疲れが癒えよう筈も無い。

小さい頃から学校の成績だけはよくて、他者とのコミュニケーションを苦手としていたわたしは、医科大学の先生の進めに従って、人体シミュレーションソフト開発プロジェクトへ参加した。患者に不安を与えてしまいそうなたしでは、臨床医は無理だ。中学生の頃から、趣味でプログラムを作り続けてきたわたしにとって、それが実用になること、そして自分に出来る事で誰かの為になれるのならはその進路はありがたかった。とは言え、やはり趣味と仕事ではそのハードさは桁違いだった。自分のペースで仕事ができないこと、他の人との打ち合わせを行わなければならないことは思った以上に精神をすり減らす。とは言え、この仕事から逃げるわけにはいかない。わたしにはこれしかないのだから。

暗闇の中に点滅する赤い光を見つけ、わたしは部屋の照明を点けて電話機に向かう。

『天音、母さんです。元気にしてましたか？ あのね、倫君……いとこの倫君の奥さんが亡くなられたんですって。前から病気がちな子だったけどね。産後の肥立ちが悪くって。明日、仕事を早引けて、お通夜にいらっしやい』

母からの留守番電話だった。軽くショックを受けたが、聞きながら、あの子なら仕方が無い、という納得もしていた。

倫の奥さんになった人は、高校時代の同級生の野田つばさ、という女の子だった。彼女はわたしと同じクラスになったこともあったが、しばしば病欠をしていて、わたしとは違う意味で友達の少ない子だった。後に倫から間接的に聞いた話では、彼女の家系には同じ

ような体質の人がしばしば現れていたのだという。遺伝子に病気が刻まれているのかもしれない。

二人が交際するようになったのは、高校3年のとき。彼女が高校の校舎の廊下で具合が悪くなつてその場に崩れ落ちたのを倫が助け起こしたのがきっかけだった。わたしも偶々その場に居合わせていたので憶えている。倫は優しい人だから、寂しさを抱えた女の子を本能的に嗅ぎ付けてその手をとるのかもしれない。わたしは仲良くなつていく二人の背中を見つめることしかできなかった。

でもわたしはつばさが嫌いではなかった。彼女は、身体は弱くても芯は強い女の子だった。人より少ない時間の中を、いかに有意義に楽しむかを実践している彼女は、わたしも憧れるところであった。だからわたしは、二人の幸せを、自分の幸せであるかのように意図的に錯覚して見つめていた。………けれど！

翌日、わたしは葬式会場で久し振りに倫と再会する。

そして一夜明け、わたしは胸にモヤモヤを抱えたまま仕事に戻った。休んでいる間も時間を無駄にしないよう、わたしのマシンはシミュレーションの実行のために動かしていた。モニタの電源をつけると、予想していた通り、大部分はシミュレーション終了、残りももうすぐ終了というところだった。まだ昨日の倫とのやりとりが頭の中でリフレインしている。画面に映る病名と治療スケジュールとその結果のリストをダラダラと眺めていると、わたしは不意に、くらり、と眩暈に襲われた。一瞬頭をよぎったヴィジョンが脳を刺激する。今のは何だ。ほんの僅かな時間のことかと思いつくことはできなかった。やはり精神的に疲労しているらしい。今日は確認作業だけにして脳のリハビリにしようか。昨日の倫の悲しみは、わたしの心にも深く鈍痛を覚えさせている。

「天音」

つばさの棺の側にいた倫は、わたしが入ってきた気配を感じて振り返り、呟くように云った。胸が締め付けられるような、今まで見せたことのない弱弱い表情だった。いつも誰かの支えになっていた彼が、誰かからの支えを必要としていた。わたしは常日頃、彼の為になら何でもしてやりたいと思っているのに、いざそうすべき時になると、その重みに耐えられそうに無い自分が情けなくて、苦々しかった。

「俺が間違っていたのか」

「え？」

「俺が本当につばさの事を愛していたのなら、結婚をするべきではなかったのかもしれない。子供を生ませるべきではなかったのかもしれない」

「……」

普段の倫なら、絶対こんなことは言わない。

倫とつばさの子の小百合はその場にいなかった。たぶん叔母さんがどこかであやしているはずだ。

「結婚なんてしないで、静かに暮らしていれば、つばさは時々体調を崩すことはあっても命にまでは障ることはなかったんだ。つばさが赤ちゃんが欲しいと言ったとき、恨まれてでも拒否していれば」「でも、つばさがそれを望んだのでしよう。亡くなったのはとても残念なことだけれど、倫との時間の証を残せたのなら満足したんじゃないかな」

針金で心臓をくぐられたような痛みを覚えつつ、愚かなわたしは必死で姑息な言葉を倫に伝えた。わたしはただ、本で読んだり、ＴＶドラマで聞いたような言葉を、つばさの性格を鑑みて舌に乗せただけだ。でも本当は、清い意味でも邪まな意味でも倫に同意していた。

「証、か。つばさも同じような事を言っていたよ」

死んでも尚、否、死んだからこそ、つばさは倫の永遠になった。倫は優しい人だけ。わたしの想いなんて、理解してはくれない。

たとえ、理解しても、もう理解していない振りしかしないだろう。

……結局この日は、あまり効率のよい仕事が出来なかった。そして今、また一つのテストケースが、死というエンドを迎えるところだった。わたしはその結果を別ファイルに保存しようとして……今朝のヴィジョンの内容を思い出した。刹那、わたしは眩んだ目の奥から手を伸ばしキーを叩いていた。シミュレーション内の時間が止まる。仕事に慣れてくると、単なる英数字の羅列が、反射的に脳内で医学用語に変換される。そして、その向こうにいる患者たちの姿にも……。

わたしは割り込みシグナルを用いて、デバッグ用に作っておいたシミュレータのパラメータ書き換えを行った。人間でいえば、体内の患部のみを強制的に取り除いたということだ。バグがあった訳でもないのにこんなことをするのは意味の無い全くの時間の無駄遣いである。また後でシミュレーションをやり直さなければいけない。仕事を忘れた愚かなわたしを嘲笑うがいい。ただのテストケースがしばさに見えたわたしを、そしてその側で泣く倫をも幻視してしまつたわたしを。

もしも、今のシミュレーションが現実の世界だったら、不治の病が、奇跡によつて治つたところだったのだろうか。今日のわたしは本当にどうかしている。奇跡の回復に喜び合う患者とその家族の幻が見える。機械とばかり向き合つて、いつもは超自然の存在など否定しているくせに。

神様。

わたしは虚空を見つめた。

もしこの世界があなたのシミュレーションであるならば、わたしに一度だけ、やりなおしをさせてください。

………マシンのうる音だけが開発室に響いていた。

ハッ、馬鹿馬鹿しい。

われに還って、己の愚拳を嘲笑う。感傷もいがかげんにして、早く現実に戻ろう。

目を閉じた。涙が出ていることに気づいた。これは疲れたせいだ。そうに決まっている。

だが、再び瞼を開いた時、わたしの目に入ってきたのは、開発室の自分のパソコンではなく、高校時代のわたしのクラスの教室の黒板だった。

3・自分の幸せを手に入れるために他人の幸せを奪う

チャイムが鳴って、わたしは目を覚ました。どうやら、授業に退屈してうつらうつらしていたらしい。何か夢を見ていたが、目を覚ました途端に忘れてしまった。よくあることだ。

4時間目が終了した。生徒たちは一斉に教科書とノートをしまい、お弁当を出したり財布を手に購買に向かっていたりした。わたしも昼食にしようとして、手を洗うために席を立つと、クラスメートの野田つばさが青い顔をして教室を出て行くのが見えた。

わたしは何やら嫌な予感がして、彼女の後を追った。

「野田さん!」

わたしはふらつく彼女を後ろから抱きとめた。

「あ……神代さん?」

「大丈夫? 様子がおかしかったわよ」

「ごめんね。具合が悪かったんで水を飲みに行こうとしたのだけど」

「うん、水を飲んだら、一緒に保健室行こう?」

「ありがとう。ごめんね」

「どうした? 天音?」

顔を上げると、隣のクラスの倫がわたし達を心配そうに見つめていた。

「あ、倫君。うん、彼女、同じクラスの子なんだけど、具合が悪くなつたみたいで」

「手、貸そうか?」

何だろう、その申し出はとてもありがたいのに、受けてはいけない気がした。

「うつん、」

「大丈夫です。ご心配おかけしてすいません」

わたしの拒否の言葉に被せるように、つばさが倫の申し出を断った。既にわたしの手をかけさせているので遠慮したのだろう。彼女

は病弱だったが、必要以上に他人に迷惑をかけたがらない女の子だった。

「そうか？ それじゃ、天音、頼むぞ」

そう言っつて、心配そうな顔を残しつつ、その場を去っていく。何故だかわたしはそれにホツとしていた。そして、つばさを自分の方に寄り添わせながら、水飲み場へと向かった。

「よっ」

放課後、わたしが生徒玄関から校門まで向かう途中の道のりで、後ろから声を掛けられ、振り返った。倫だった。

「お前もいいところあるじゃないか」

「え？」

「昼休みの事だよ。天音はあまり他人と係わりたがらないと思っただけど、あんなに親切に優しく出来るじゃないか。見直したよ」

「そんなこと」

あれは偶然と気まぐれの結果だ。けれど倫が褒めてくれた事が嬉しくて、わたしは顔に血を上らせたのを隠すために俯くだけだった。

「あの子は大丈夫だったか？」

「うん、あれから保健室のベッドで休んで、しばらくして家に帰ったみたい」

「そうか。……ま、大事がないならよかった」

「うん」

「天音、今日は一緒に帰ろうぜ。久し振りに天音といろいろ話をしたい」

「え、あ、うんっ」

その日の出来事がきっかけで、わたしの生活に劇的な変化が訪れた。次の日からつばさによく話しかけられるようになり、友達

そう言っつていいだろう になった。彼女と話すうち、その生き様にわたしは惚れた。それは、日々常に幸せを求める生き方とでもい

うべきか。

負の感情を持ったとき。未来に漠然と不安を持ったとき。辺りを見回してみればそこかしこに、その時の自分の心に必要なものが転がっている。とても単純だったが、彼女との会話を意識してみると不思議とそれが本当のことであることを実感する。わたしが明確に目的意識を持って医大を目指すようになったのもそのおかげだ。以前は、自分の成績に見合った大学をと漠然と近くの医大を進路に目指していたが、医療について意識しながら生活していると、街角の病院施設やマスメディアなど、教科書では得られない知識と意識がすぐそこにあることに気づく。自分の目指す医療の道の重要性を肌で感じる事ができると、こんなにもモチベーションが変わるものなのか。わたしはつばさに感謝せねばなるまい。

そして、もうひとつ 倫とわたしの距離も縮んだ。彼から言葉を掛けられるのを待っているだけでは我慢できなくなって、偶然を装って彼との会話の時間を作り、やがて偶然を装う必要もなくなった。そしてある日、一緒にわたしの家で受験勉強をしているとき、わたしの方からベースをねだって、それからそういう関係になった。恋愛的接近をする相手が手近な幼馴染の親戚というのが、わたしらしい情けないところだが、それでも倫はわたしを受け入れてくれた。

やがて医科大学に進学した時には、わたしは既に研究医の道を進むことを決めていた。以前、つばさから聞いたのだが、彼女の持病は、症例も少なく、原因が不明瞭で治療方法が確立できないものらしい。彼女のためだけに、という訳ではないが、自分の能力を活かして、出来る範囲でそういった人たちを救いたい。それがわたしの目標だった。そしてわたしは、医師免許の取得と同時に人体シミュレーションソフト開発プロジェクトに参加することが決まった。

4・目が覚めて忘れた夢の記憶は、夢うつつの状態で蘇る

毎日が充実していた。半日以上をマシンの前で過ごす生活は厳しかったけれど、プログラムは楽しいし、医療現場で実際にそれが動いているという話を聞くと、自分が役に立っているのだと実感できて嬉しい。

そして何よりも、倫と結婚し、二人の生活を始めた事が、疲労を充実に変えてくれた一番の原因だ。わたしの仕事が忙しくて二人で過ごす時間は短くなり、愛を確かめ合う手段が性交に偏りがちになるだけが悩みの種である。と、いうより、自分自身がこんなに性交を欲しがる女だとは思わなかった。幸せになると、それを失うのが怖くなるというのは、わたしもその例外ではなかったのだ。

「倫くん」

「ん？ 何だ？」

「ううん。何でも無い」

幸せが永遠に続けばいいと思っていた。

だけど、夢の終わりが始まった。

シミュレーションを始める際にざっと眺めたインプットデータから、つばさの顔を想像したのは単なる直感だった。仕事が忙しくて最近はずっかりつばさとも疎遠になってしまったが、彼女から聞いた持病の症状は覚えていた。そしてこのデータを持つ女性が、年齢も血液型もつばさと同じであることにも気づいた。個人情報保護の法律があるから、データを入力するだけのわたしにはこれが誰のものなのかということはわからない。わたしが彼女を知っているから、先入観を持って想像しただけだと思う。でも、その時は、特に問題はなかった。心の内に留めた個人的感情からこのデータのシミ

ユレーシオンは成功で終わらせたいと感じただけだから。

けれど、死という終わりと、生という終わりの双方の結果を並べてみたのが、わたしの夢の終わりの始まりだった。シミュレーションソフトの検証であるのだから結果を比較するのは当然のことなのだけれど。

つばさ（と、わたしが名付けたデータ）の辿った幾つもの分岐したルート。現実世界ではありえない、死と生の隣り合わせ。そしてわたしはそのデータの羅列を、はるか昔に見た覚えがあった。

ああ、そうか、そういうことだったんだ。思い出した。

ここは、わたしが願った、もしもの世界だったのだ。倫を悲しみから救いたいという、わたしの感傷から生まれた、ありえない夢の世界だったのだ。現実逃避をした、愚かで哀れなわたしだけの空想だったのだ。

いいじゃない。誰も死なない、悲しまない世界なのだから。

わたしはわたしに思考停止を呼び掛ける。

つばさは病気がちながらも、静かに生き続けることができるし、わたしのシミュレーションソフトが正しければ、この結果次第で快方に向かつてくれる。倫は、大切な人を失う悲しみを免れる。そしてわたしは、倫の傍にいられる。

なんて、幸せな、世界。

うふふ。

気味の悪い忍び笑いを漏らしたのはわたしだった。

「おう、お帰り」

暖かな光あふれる部屋へ帰宅したわたしを、倫が優しい声で迎えてくれる。いつもの、かけがえのない幸せの証。

「おい、どうした、天音？ 泣いているのか？」

ただいま、と言い掛ける前に彼はわたしを心配してくれる。そんなにわたしは酷い顔をしていたのか。

「ううん。疲れただけ」

「そうか？」

言いながらも彼は身体を起こしてこちらに近づいてくると、わたしの身を抱き寄せ、髪を撫でて額に二度三度と接吻をしてくれる。

なんて、幸せな、夢。

夢の中で夢だと気づいたとき、それはもうすぐ夢から覚めるということだ。目が覚めたとき、わたしはあのシミュレーションの結果を覚えているだろう。そして、生と死を分けた原因を発見するだろう。そしてそれをつばさの病気の有効な治療方法への提案として提出することになるだろう。そして……わたしは自分が独りであることに気づくだろう。倫は、わたしを恨むだろうか。わたしの治療法が正しくても、本当の世界では、つばさはもういない。助けられはるの彼女を助けられなかったわたしは倫から恨まれてもしかたがない。倫は優しい人だから、直接そういう態度は見せないだろうけど。だからこそわたしはつらい。

「倫くん、わたしのこと、愛してる？」

力を込めて彼に抱きつき、陳腐な言葉をわたしは求める。

「愛しているよ」

ぎゅっ、と。痛くて、嬉しい。

「……おい、ホントにどうしたんだ、天音？ なんで泣いているんだよ？」

「幸せだもん。人は幸せな時に涙を流すんだよ」と、薄っぺらな嘘

を付く。

だけどお願い。夢から覚めるまでは、倫との時間を、偽りの幸せを感じさせて欲しい。淫らな女と思われてもいい。彼のぬくもりを感じさせて。わたしは倫にしがみつくのと、背中にまわされるに決まっている筈の彼の手の感触を待った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4534e/>

隣のあなた 隣のわたし

2010年10月8日15時50分発行